

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 6 月 15 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	水野佳緒里

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
鹿児島県、屋久島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
屋久島実習<野生ニホンザルの個体追跡から学んだこと>
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 18 日 ~ 平成 26 年 5 月 26 日 (9 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター、京都大学霊長類研究所
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>PWS 主催の屋久島実習に参加した。本実習の趣旨は、実習の参加者 (PWS の履修生やその他の希望者) が屋久島でフィールドワークを経験することであったと考えられる。実習プログラムは全部で 4 つ (A)サルコース、B) 昆虫コース、C) 植物コース、D) シカ (および他の哺乳類) の糞コース) あり、その中で私は A) サルコースを選んだ。本コースを選んだ理由は、これまでに野生動物の個体追跡をしたことが無かったためである。私はこれまでに研究の一貫で、国内の飼育下ゾウの行動観察を行ったことがあるが、そこでの個体追跡というのは、放飼場という限られた空間にいる対象個体を放飼場の外から観察するのみであった。そのため、対象動物の生息域に入り込み、長時間追跡したことが無かった。そこで、本実習における個人の目的は、野生ニホンザル (<i>Macaca fuscata yakui</i>) を長時間追いつけることで、自分自身が野生動物を追跡・観察する際に必要な技術を学ぶこととした。因みに、A) サルコース全体の目的は、サル採食行動の観察、糞内容物の分析、糞の DNA 解析からサルの採食生態を探ることであった。その研究結果は、サルコースの参加者が別途報告書にまとめている。本報告書では、調査において個人が経験したこと、学んだことを述べる。</p> <p><b>追跡個体発見の難点</b></p> <p>調査 1 日目 (5 月 20 日) は、悪天候の影響もあり、なかなかサルを見つけることができなかった。9 時 45 分に調査地に到着し、そこから林道を歩きサルを探したが見つけれず、2 時間 30 分後の 12 時 15 分ようやく森から出て道路を横切るサルを発見することができた。その日以降の 3 日間では、サルの鳴き声を察知する、路上で偶然出くわす (図 1) などで比較的短時間で発見することができた。</p> <p>また、本調査ではサルの行動観察の他に、追跡個体の糞を採取することが課題であったが、枯葉の上に落ちた糞を見つけることも大変であった。糞の匂いや、糞に集る虫の存在を手がかりにし、目を凝らしてなんとか見つけた。</p> <p><b>サルの観察・追跡</b></p> <p>4 日間にわたる調査で最も実感したことは、観察・追跡するのが想像以上に困難であったことである。対象個体が木の上で実や葉を採食する際に、観察者は葉の隙間から観察しなければならなかった (図 2)。頭上にいる対象個体の行動を一度ノートに記入し、再び見上げると、観察していたはずのサルの位置がわからなくなることや、見失ったこともあった。また、対象個体を含め複数頭のサルが木の上にいる時に、対象個体をその他の個体と間違えないように努めることも必要であった。</p> <p>長距離移動をする個体の追跡も困難であった。対象個体は、険しい道を軽々と進んでいった。特に、調査 3 日目 (5 月 23 日) に 1 個体を 4 時間 30 分 (9 時から 13 時 30 分まで) 追跡した時は、対象個体はいくつもの尾根を越えて進んでいったため、体力的にとっても疲れた。しかし、4 時間 30 分追いつけたことで、採食行動以外にも、睡眠 (図 3)、グルーミング (図 4) など、様々な行動を見ることができた。</p> <p><b>ニホンザルの社会行動</b></p> <p>今回の調査の目的とは関係無いが、個人的に社会行動に興味があるため、調査で観られたニホンザルの社会行動について感じたことを記述する。木の上でニホンザルが採食している時に攻撃行動が数回観られた。一つの木でも実が豊富に生る箇所にはばらつきがあり、その場所を取る、または守るために威嚇をしていたと考えられる。4 日間の調査で私が攻撃行動を観たのは 5 回、そのうち 2 回は採食中に観られた。また、調査中に 1 匹のサルが木の上で寝ていて、他のサルが近づくと威嚇していた。このように、ニホンザルは社会行動を通じて、縄張りや採食場所を維持していると考えられる。</p>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

群の全個体の順位を決めるとすると、おそらく、あらゆる個体間の優劣関係を1日に数回しか起こらない攻撃行動などから評価しなければならないと考えられるため、大変だと思った。

社会的グルーミングも見られた。興味深かった行動は、調査3日目に追跡したオトナオスの Sofu という高齢個体が、10m ほど離れたところからグルーミングをしているオトナメスとコドモに近づき、グルーミングをしたことである(図5)。おそらく、Sofu は自身にグルーミングをしてもらうために、まず初めに自ら他個体に近寄りグルーミングをしたのではないかと考えられる。

今回の実習では、野生ニホンザルの個体追跡・観察から様々なことを学んだ。野生動物の調査者からすると、今回私が学んだことは当たり前のことであると考えられるが、これまでに全く野生動物の追跡をしたことがない私にとってはとても貴重な経験となった。また、実習中、講師の方々や同コースの仲間たちから多くのことを学んだ。例えば、重い双眼鏡を首にかけ、リュックに大きなカメラを入れたまま軽々と山を登られていたこと、自分が察知できなかったサルの鳴き声や、糞の匂いを察知されていたこと、長時間安定したテンションでサルを追い続け、多くの糞を見つけられていたことなど、尊敬すべき点が多々あった。

今回の実習において、苦労したことは多かったが、それも含め、とても楽しかった。屋久島実習で過ごした日々は大変有意義なものであり、参加して良かったと心から思った。



図1 林道を歩くニホンザル

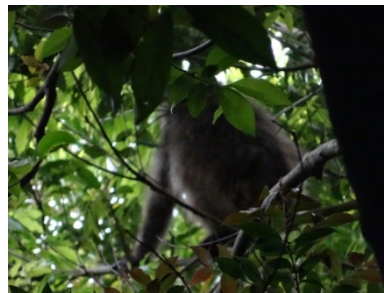


図2 木の上で採食をするニホンザル



図3 睡眠中のオトナオス、Sofu とそれを観察するサルコースの参加者



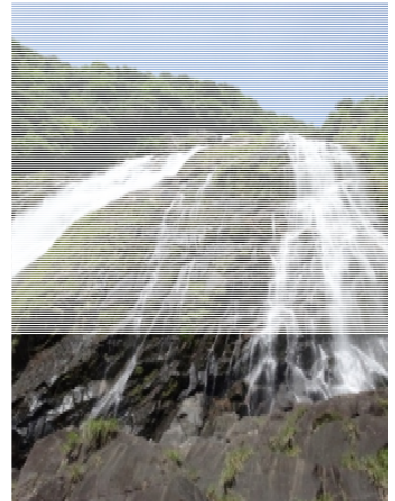
図4 グルーミングをするニホンザル



図5 オトナメス(写真左)に近寄りグルーミングをし始めるオトナオス、Sofu(写真右)

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



屋久島でコウモリの調査をされている Prof. David A. Hill によるレクチャー

大川の滝



ニホンザルとシカ



種子をくわえている鳥



クチナシ(?)の花



サルの追跡後に見た景色



鹿児島島から大阪へ向かうフェリーから見た景色

## 6. その他 (特記事項など)

今回の調査にあたり手厚いご指導を下さった講師の阿形清和先生、岸田拓士先生、栗原洋介さん、澤田晶子さん、鈴木真理子さん、鈴木崇文さん、早川卓志さんに心より感謝いたします。お陰様で事故を起こすことなく、楽しく調査をすることが出来ました。また、実習中に毎日おいしいご飯を作ってくれた山尾さんと手塚さんに感謝の意を表します。屋久島実習参加者の皆様からは様々な刺激を受けました。誠にありがとうございます。最後に、今回の実習の統括者である杉浦秀樹先生を始めとする引率者の皆様に心より感謝いたします。